

木を挽く…爺さんの手伝いで、丸太から板を挽く少年たち。小さい時から大人の作業を見ているから、だんだんできるようになる。



村の人との共同作業で作った、村の図書館。



陸稲の稲刈り。土日、子どもたちも稲刈りのお手伝い。手伝いというよりも、子どもの力なくては、とても作業は追いつかない。



力いっぱい、トウモロコシ畑を耕す。

うモンの人々に、自分の常識をひっくり返される思いがした。半年目の終わりになんとか棟上げをして、茅葺きの屋根を葺いたところで、作業は一時中断。雨季が始まると、みな農作業に忙しいからである。再度、二年目の乾季に作業を始め、半年後にやっと図書館が完成した。

現在、図書館は村の若者3人がスタッフとして、週三日平日に開いている。最初、土日に開こうと言うと、村の人に「土日に子どもは来ないよ。みんな忙しいんだから」と言われた。休みには、子どもたちも山の畑で農作業を手伝うから、村の中にいないのである。平日の開館日には、小学校の昼休みや放課後、子どもたちが大勢駆けこんできて、「この本読んで、あの本読んで」「おえかきしたい」などなど、夢中に小一時間過ごし、さっといなくなる。ある程度の年齢になると、子どもたちは、水汲み、牛や水牛の世話、豚や鶏のえさやり、薪とり、飯炊きなど、任されている家の仕事をしなくては行けないからだ。図書館にかごや天秤棒をかついできて、少し道草をしてから、作業に行く子どもいる。親は夕方遅くまで帰ってこないが、子どもたちは自分にまかされた役割をちゃんと認識していて、いちいち指示されずともちゃんとやっているのには本当に感心する。それは、小さい頃から、大人やお兄ちゃんお姉ちゃんの働く姿を見て、一緒に水汲みに行き、畑に行き、見よう見まねで作業を覚え、少しずつ経験しながら育ってきているなかで、自然に身についた



水汲み…水汲みは子どもたちの仕事だ。村の水場から、天秤棒で何往復もする。村の子どもたちは小さい時から、お兄ちゃんお姉ちゃんのやることなすことを見て育つ。



薬遊ぶ……山にワラを取りに行った子どもたち。山の斜面は、水がひけるところは棚田に、ひけないところは陸稲を植える。山は畑であり、そして子どもの遊び場でもある。

きているものである。子どもたちは、日々の生活のなかで、生きる力と知恵をその手足、身体に身につけながら育っている。小さい頃に実際に経験することから身につく力は、一生ものである。私は、今、日本の子どもたちに一番欠けていることは、こういうことだろうと思う。生活を生きる中から実際に身体で学ぶこと。今、ラオスから私たちが見習うべきことは、こういうことではないか、と山の村でよく思う。

それでも、山の村にも図書館が必要だと思うわけは、今の子どもたちの将来は、村の中だけには閉じていないからである。将来、多くの子どもたちは外に出て行かなくてはいけない。それに、現在は山の奥の村であろうと、経済活動が入ってきている。外部と交渉なしの村のなかの自給自足の生活ではなくなってきている。そんな社会変化の流れのなかで、ただ流されるのではなく、自分で判断ができ、ちゃんと生きていける人になってほしい。そのためには、子どもたちが心のなかでもいろいろな出会いや経験を積み、より広い世界、知識に接し、心の基礎を築いていくことが大切なのではないか。そう思って、山の村の図書館活動を応援している。

私は、もう一カ所、ピエンチャンの自宅横で、小さな文庫を開いている。そこは古くからの村落ではなく、ピエンチャンの近郊から職を求めて出て来て、安いお金で土地を借り、竹やタタン板でバラック小屋を作り住んでいる人たちが多い場所である。屋台を引っ張っている人、竹

子どもたちはお話を聞くのが大好き。図書館のお姉さんの話を真剣な顔で聞く。(山の村の図書館)



学校が終わると、足の踏み場もないほど、子どもたちでいっぱい。(山の村の図書館)



やすい きよこ / ラオス山の子ども文庫基金
代表

東京都生まれ。国際基督教大学卒。NGOの派遣で、タイのラオス難民キャンプで、モン族の子ども図書館活動を担当。その後、ラオスのモン族の口承文学の記録を始める。現在、ラオス山の子ども文庫基金の代表。蒙の村、ピエンチャンで子ども図書館活動を継続中。

かごを編んでいる人、土木労働者、また、なかには無職で麻薬中毒患者も多い。いい環境ではない。しかも、地価が高騰しているなか、いつまで住んでいられるかもわからない不安定な状況である。そんな環境のなかにいる子どもたちが、自由に遊びに来られる子どもの場所となればいいと思い、文庫を開いている。土日には子どもたちが来て、一日中遊んでいる。本を借りて行く子どもがいるが、この文庫は「居場所」としての役割の方が強いかもしれない。きっと、家に居場所がない子どもたちも多いのである。中学に入っても経済的理由からやめてしまう子どももいる。今、どんどん発展ははじめているように見えるピエンチャンで、どう這い上がるうにも這い上がれない環境にいる子どもたちもいる。そんな子どもたちが、少しでも夢と希望を持って、自分の人生を生きるようになるにはどうしたらいいのだろう？ いったい私たちは図書館活動のなかで何ができるのだろう？ と悩みながらやっている。

ラオスの子どもたちが、今の急激な社会変化のなかで、「生きる力」を失わずに、自己をしっかりもち、人生を切り開いてしっかり生きてほしいと願うばかりである。